特集「文法化」・研究ノート

場所・方向を表す前置詞表現について[1)]

村上　右一

１．序論

ドイツ語において、「場所」や「方向」を表す表現方法はさまざまある。例えば、副詞、半接頭辞いわゆる分離前綴り、そして前置詞などがある。だがここでは、それらのうち前置詞を扱っていくことにする。

ドイツ語の前置詞で特徴的なのは、前置詞の後に特定の格が現れることである。この格がその表現方法に大きく影響している。例えば、現代英語における前置詞は、格支配をしなくなっているので、その後にくる名詞の形はすべて同じ形と言える。つまり、その表現方法には影響していないようである。だが、ドイツ語は、前置詞によってその後の名詞のとる格が異なっており、それによって意味の区別がなされる。例文を示すと、

（１）Wir stehen auf einem Berg.
　「我々は、山の上に立っている。」
（２）Wir steigen auf einen Berg.
　「我々は、山に登る。」

（１）、（２）の例文で、前置詞 auf を使った例文を示したが、この auf という前置詞は、ドイツ語では３・４格（与格・対格）支配の前置詞である。例文を見てみると、（１）は場所、（２）は方向を表している。こうした場所や方向を表す表現と格との関係は、以前から研究がなされており、そのことは池上（1981）に的確な紹介[2)]がなされている。以下に

Cercle linguistique de Waseda (ed.),
Travaux du Cercle linguistique de Waseda vol. 10, 2006, 98-109.

一部引用してみる。3)

> 例えばヴュルナーでは、＜どこに＞は与格（Dativ）、＜どこから＞は属格（Genitiv）、＜どこへ＞は対格（Akkusativ）というのが基本であった。　ただし、与格には積極的に＜どこに＞対応する場合、＜どこから＞／＜どこへ＞の対立が中和される場合、＜どこから＞／＜どこへ＞が共存する場合と三つが下位区分され、それぞれ位格（Lokativ）、具格（Instrumental）、奪格（Ablativ）が対応するものとされた。

池上はこのことに加え、さらにハルトゥングの例も出し、彼が静止をさらに滞在（Aufenthalt）と指向（Richtung）に分けているということも述べている。引用部分を含め、以上までをまとめると、属格は起点、与格は静止位置、対格は到着点などの方向を示すということが言えよう。こうした点を踏まえ、これからいくつかの前置詞についての考察に入るのだが、そもそも、このテーマを選んだ理由は、特に日独の対照文法的な関心から出たものである。日本語において、方向や到達点を表す場合、「に」、「へ」などが使われるのだが、それとは対照的に、ドイツ語で方向や到達点の意味で使われるいくつかの前置詞には、それぞれの用いられ方に何らかの違いがあり、それは日本語の「に」、「へ」以上にあるように感じられる。そこで以下に、その違いを対応する日本語の文を交えながら説明していくことにする。まず、場所表現の際に用いられる前置詞について検証していきたい。

２．場所表現の前置詞

以下に、日本語の助詞「に」が使われる文例とそれに対応するドイツ語の文例とを対比させることにする。

（３）私は、友達に本を渡す。
（４）Ich gebe dem Freund ein Buch.
（５）私は、友達に手紙を送る。
（６）Ich schicke einen Brief an den Freund.

（７）私は、教会に行く。
（８）Ich gehe zur Kirche.
（８’）Ich gehe in die Kirche.
（９）私は、ベルリンに行く。
（10）Ich fahre nach Berlin.
（11）私は、通りに出て行く。
（12）Ich gehe auf die Straße.
（13）私は、修道院に入る。
（14）Ich gehe ins Kloster.

以上、助詞「に」を用いたあくまで数例ではあるが、それぞれに対応するドイツ語の文例を添えて提示してみた[4)]。ここで注目したいのは、「に」一つとってもかくも多くの前置詞がそれぞれに対応して使われているということであり、そしてそれはなぜかということである。以下に、その理由を検証すべく、上で使われている前置詞一つ一つを細かく見ていくことにする。これらの前置詞は、用法上二つに分けられる。それはすなわち、与格・対格支配のものと与格支配のものである。

３．与格・対格支配の前置詞

これらの前置詞に特徴的なのは、いずれも意味において明瞭な位置関係を表現できるということである。まず、an から検証していく。

①a. Ein Bild hängt an der Wand.「一枚の絵が壁にかかっている。」
b. Frankfurt am Main「フランクフルト・アム・マイン」
c. Am Abend「晩に」
d.Tür an Tür wohnen「隣り合わせに住む」

前置詞 an は、主に横からの接触と考えるとよい。b や d がその典型的な例と考えられる。それを比喩的に応用し、時間の表現に使ったものが c であるが、時間の流れを線で捉えるとこの表現には納得がいくと思われる[5)]。a も絵と壁が接触しており、横からの接触を応用して用いられていると考えられる。

②a. Das Buch liegt auf dem Tisch.「その本は机の上にある。」
b. Ich wohne auf Kuba.「私はキューバに住んでいる。」
c. Ich arbeite auf der Bank.「私は銀行で働いている。」
d. Ich bin auf der Universität.「私は大学に通っている。」

auf は、主にその前置詞以下の名詞の上との接触を表現する際に用いられる。a はその典型と言えるが、c や d は a とすぐには結び付きにくいように思われる。だが、b でキューバは島であり、島にいる、あるいは島に住むなどの場合には auf が使われる。これは、「島の上にいる」のように考えればよさそうである。ここから派生して、場所にも使われるようになったのであろう[6)]。c や d の用例に、このことはあてはまると言える。

③a. Das Buch liegt im Schrank.「本は書棚にある。」
b. eine Entdeckung in der Astronomie「天文学上の発見」
c. Die Maschine ist in Betrieb.「機械は作動中である。」
d. in der Schweiz「スイスで」

in は、主に場所表現でよく使われるが、上記の例文で示されているように、何らかの限定された空間あるいは領域を表現する際に用いられると考えてよいと言える。a はその点がよく表れており、それが派生して b,c,d の例文に用いられていると考えられる。c であるが、状態という限定した空間内のことと考えればよいということになる。

４．与格支配の前置詞

次に与格支配の前置詞 nach,zu についてであるが、まず nach から述べることにする。

④a. Wir fliegen nach Süden.「我々は南へ飛んだ。」
b. nach dem Krieg「戦後」
c. nach Goethe「ゲーテによると」

nach は着点を表し、移動の動詞と共にしばしば用いられ、その典型が a である。ここから派生して、単に方向を表すのみならず nach が支配する名詞が判断の基準となる用法が c、後時性を表現したものが b と考えられる。

⑤a. zur Stadt fahren「（乗り物を使って）町へ行く」
b. Ich bin zu Hause.「私は家にいます。」
c. Wir gehe zur Tisch.「我々は食卓につく。」

zu は、上の例でもわかるように nach とかなり使われ方は似ていることがわかる。しかし、細かく見ていくと、特に b の例文でよく表れているが、nach より場所の意味が強調されたものになっていると言える。詳しくは、次の５．で述べることにしたい。

５．考察

上では、ほぼ例を挙げたのみに終始したので、ここでもう一度３．と４．で説明した前置詞のそれぞれの用いられ方について整理したい。まず、auf, in, zu の３つの前置詞の意味範疇の違いから見ていくことにする。

⑥a. Sie geht auf den Bahnhof.　「彼女は駅に（たとえば切符を買いに）行く。」
b. Sie geht in den Bahnhof.　「彼女は駅の中に入る。」
c. Sie geht zum Bahnhof.　「彼女は駅へ行く。」7)

いずれも方向を表す文だが、ここに明確な意味の違いが出ていると言える。というのも、zu は単に目的地を指すにとどまっている。しかし、auf, in はそこにとどまらず、in はここでは到着後の意味ではあるが、到着した場所の中の位置関係を意味し、auf はさらに何らかの目的まで表していることがわかる。つまり、auf は場所への強い関心にまで意味が及んでいると考えられるだろう8)。

次に nach, zu, in の用いられ方の違いであるが、無冠詞の市町村名、国名、地域名、大陸名の前におくことができるのは nach だけである[9)]。冠詞を伴った表現には in を用いるのだが[10)]、これに関しては③d の例文に示したとおりである。そのため、例えば次の文は無冠詞で用いられているために非文となる。

④a’∗Wir fliegen in Süden.

さらに、nach, zu の使われ方だが、次のような使い方もある。

⑥a. die Universität zu Berlin「ベルリン大学」

こうした用法が、例外的と言えるのか、あるいは古くはこの使い方がなされていたが、今ではほとんど廃れた表現である。これに関してはさらなる考察が求められるのだが、それは、別の機会で論じたい。また、an, auf の用法だが、現在では auf が使われるが、古くは an が使われていたり、方言、とりわけスイスやオーストリアで用いられているドイツ語ではいまだにこの使われ方がなされていたりするということに関しても、別の機会に回したい[11)]。

６．方向表現で用いられる前置詞

では次に、方向を表す際に用いられる前置詞について検証していく。ドイツ語において、前置詞表現で「移動の方向」を表す際には、前置詞の後に置かれる名詞の格は基本的に対格が用いられる。例えば、

（15）Sie fahren in die Stadt.
「我々は、町に行く。」

（15）で、前置詞 in の後には名詞の対格が用いられていることがわかる。ここで、この例文の日本語訳に注目してみると、日本語では移動を表す際に用いられる助詞は、（15）の例文では「に」であり、他に「へ」などが主に用いられる。

では、ドイツ語ではどのような前置詞が用いられているかを以下で見ていくことにする。「方向」をさらに分類すると、次の３つに分類できると考えられる。

Ⅰ．起点
Ⅱ．通過点
Ⅲ．到着・目標点

上に挙げた３つに相当する前置詞を用いた表現のうち、Ⅲの到着・目標点についてのみ、さらに以下で論じていくことにする。というのも、このⅢの用例のみが、日本語における「に」、「へ」にあたり、Ⅰ、Ⅱは、これに該当しないと思われるからである。

７．到着・目標点

到着・目標点を意味する前置詞は、大きく３つに分類できる。というのも、１．で述べたようにドイツ語の前置詞は、後ろに特定の格の名詞が現れるという特徴を持つのだが、そのうち、与格・対格支配の前置詞と対格支配の前置詞、与格支配の前置詞のグループに分けることができる。与格・対格支配のグループは、an, auf, hinter, in, neben, über, unter, vor, zwischen であり、対格支配のグループは、für, gegen、与格支配のグループは、nach, zu である。前者のうち、既に１．で述べたように、到着・目標点を意味する際に用いられる格は、対格を用いることは言うまでもない。例文を挙げると、

（16）Sie hängt das Bild an die Wand.
「彼女はその絵を壁へ掛ける。」
（17）Sie ist auf die Knie gefallen.
「彼女は、ひざをついた。」
（18）Er schob die Diebesbeute hinter den Schrank.
「彼は、盗品をたんすの裏へ押し込んだ。」
（19）Er trat ruhig in die Schranken.
「彼は、悠然と柵の中へ歩み行った。」

（20）Er führte mich neben die Hausfrau an den Tisch.
「彼は私を、その家の主婦と隣り合わせにテーブルにつかせた。」
（21）Er hängt ein Bild über die Couch.
「彼は、絵を寝いすの上へ掛ける。」
（22）Er ist unter die Räder gekommen.
「彼は、車の下敷きになった。」
（23）Ein Junge trat vor den Offizier.
「一人の少年が、将校の前へ進み出た。」
（24）Er ist gestern zwischen das Blumengeschäft und die Bäckerei umgezogen.
「彼は昨日、花屋とパン屋との間に引っ越した。」

上で挙げた９つの例文は、いずれも対格の名詞をとった前置詞が用いられている。（21）では、über を挙げている。über は、対格で用いたものでも、その用例によっては「通過点」の意味が出ることもあるのだが、（21）の例文からもわかるとおり、「到着・目標点」の意味が出ていると考えられる。
では次に、対格支配の前置詞を見ていくことにする。

（25）Sein Wagen ist gegen einen Baum an der Straße gefahren.
「彼の車は、道端の木にぶつかった。」[12)]

次に、与格支配の前置詞を見ていく。
（26）Dieser Bus fährt von Tokyo über Okaya nach Nagoya.
「このバスは、東京発岡谷経由名古屋行きです。」
（27）Er hat offen zu mir gesprochen.
「彼は、私に率直に話してくれた。」

１．で既に述べたように与格・対格支配、対格支配の前置詞が、格支配している名詞の方向に向かうという意味で用いられるのは言うまでもないことであるが、最後に挙げた３格支配の前置詞の中に、方向の意味で用いられているものが存在しているのだが、このことこそが、ここ

で問題となる点である。これに関する見解を以下の８．で述べていきたい。

８．考察

７．で３種類の前置詞の特徴を述べてきたのだが、最後の与格支配の前置詞で挙げた２つの前置詞について述べることにする。

この２つの前置詞は、場所表現の際にも用いられているのだが、前者は、無冠詞の市町村名、国名、地域名、大陸名などの前に置くことが可能である[13]。後者は、地名を除いた場所、人物などを意味する際に用いられる。ただ、同じ名詞でこの２つの前置詞をどちらも用いられるケースもある。例えば、zu Hause という表現は、初期新高ドイツ語の時代には「存在点」を表す場合にも「着点」を表す場合にも用いられていたが、この前置詞句だけではどちらか区別することができず、共に用いられる動詞、または名詞の意味等から、「存在点」を表しているのか、「着点」を表しているのか判断しなくてはならなかった。現代では「着点」を表す場合には、zu に代わって nach が用いられるようになったと言われている[14]。しかし、これを理由にして、nach は「着点」を表し、zu は「存在点」を表すと断定することはもちろんできない。(27) では、zu は「方向」を意味していると言えるためである。

９．まとめ

これまで、日本語で「に」、「へ」にあたる「場所」と「移動」の表現においてどのようなドイツ語の前置詞が用いられているのかということについて論述してきた。まず、場所表現の際についてであるが、与格・対格支配の前置詞と与格支配の前置詞とでは、その用いられ方が、文法的に異なりはするものの、この分け方で使われ方が異なるわけではなく、また結果としてそれぞれの前置詞が、ある程度相補分布がなされていることがわかったのだが、きれいな形でなされているかというと、そのようでもないことが今回の調査で判明した。例えば、次の方向表現の際についての所でも述べることになるのだが、nach と zu との関係性である。また、auf と an との関係性もここにあてはまっていると言える。

次に、方向表現の際についてであるが、日本語ではやはり主に「に」

や「へ」などが多用されるが、ドイツ語の方向を表現する際に用いられる前置詞は、多用であり、こちらも場所表現と同様に、それぞれの前置詞の用いられ方が、意味の上で完全な形として相補分布がなされているわけではないことがわかったことである。どちらの表現の際にあてはまることであるが、例えば nach と zu の分析など、不明な部分も依然残っている。さらに、ドイツ語には移動を表現する際、他にも表現方法は存在していることは１．で述べたとおりである。特に、半接頭辞いわゆる分離前綴りを用いた表現である。これは、ドイツ語特有の表現方法でもあり、これに関する研究は、まだ詳細な調査をする必要がある。

本論文では、限定された資料の中から考えられる点に的を絞って述べてきたのだが、今後はさらに資料を増やすことや、歴史的な観点からの調査などといったことが、今後に残された課題であるといえる。

注

１）　本論文を作成するにあたり、金沢大学の宮下博幸先生に貴重なアドバイスを頂いた。深く御礼申し上げたい。

２）　池上（1981）S.11―25

３）　ここでの引用は必要最低限にとどめた。というのも、格の理論の考え方を紹介することが、この論文の趣旨ではないためである。

４）　ここで挙げた例文のうち、（４）、（６）は前置詞を用いた例文ではないが、日本語「に」、「へ」を用いた例文ということで挙げた。

５）　こうした時間表現にはよく用いられ、他に Tag「日」，Abend「夕方」，Anfang「はじめ」，Ende「終わり」などに使われる。

６）　Schröder（1986）S.63-64 には、公共機関、交通施設を表す場合に使われるとある。また、国松（2000）S.190 には、建造物などに用いられる場合、その建造物本来の営みにかかわる場合に用いられる場合があるとしている。なお、ここで c,d と同じような意味で使われている例文を２つ提示した理由は、こうした用例は一般的であることを強調したいためである。

７）　在間（1982）S.466。ここには、「次の３つの文は意味が異なる。」としか書かれていない。

８）　劇などで使われるステージは観客の視線を集めやすいように、高い位置にあ

るが、この「ステージで」という表現において auf が用いられ、一般化したのではないかと考えられるが、これはあくまで想像である。

９）　Schröder（1986）S.155

10）　Duden（1984）S.361

11）　国松（2000）S.103。Duden（1984）S.387。Duden（1984）には、中高ドイツ語、初期新高ドイツ語において、当時 auf の代わりに an が用いられていたという記述があり、例えば an der Erde をはじめ４例挙げられている。また、auf の代わりに an が用いられるケースとして、とりわけスイスやオーストリアといった地方特有の表現として残っているという記述が見られ、…am Grunde seines Wesens（Musil）をはじめ４例挙げられている。

12）この２つの前置詞は、同じ「到着・目標点」の意味でありながら、対概念の意味で用いられることが多い。英語における for と against の関係にかなり近い。この２つの前置詞の意味であるが、前者は、「行為によって実現、到達を予期させる目標」を意味するが、後者は、「物体などの衝突の対象」を意味する際に用いられる。

13）Schröder（1986）S.155。また、冠詞とともに用いられる国名を用いる場合（例えば die Schweiz, dieTurkei,usw.）には、３・４格支配の前置詞 in を用いる。

14）森澤（1994）S.104。

使用辞書

Duden: Grammatik der deutschen Gegenwartssprache. Mannheim/ Wien/ Zürich　[4]1984.

国松孝二他編　『独和大辞典〔第２版〕』、小学館、2000 年

参考文献

Helbig, Gerhard/Buscha, Joachim：Deutsche Grammatik. Ein Handbuch für den Ausländerunterricht. Enzyklopädie. Leipzig.　1977.　（在間進訳『現代ドイツ文法』、大修館書店、1982 年）

Schröder, Jochen：Lexikon deutscher Präpositionen. Enzyklopädie. Leipzig. 1986.

池上嘉彦　『「する」と「なる」の言語学』、大修館書店、1981 年
岩崎英二郎・小野寺和夫共編、『ドイツ不変化詞辞典』、白水社、1988 年（第 15 刷）
西郷啓造　『ドイツ語前置詞の研究』、三修社、1954 年
千石喬　「場所不変化詞（Lokalpartikel）の基本意味構造と用法の展開――場所理論的観点から」、『外国語科研究紀要』、第 38 巻第１号、東大教養学部外国語科編（ドイツ語学文学論文集）、1990 年
田中茂範、松本曜　『空間と移動の表現』、日英語比較選書６、研究社、1997 年
牧野成一　『ことばと空間』、東海大学出版会、1978 年
森澤万里子　『初期新高ドイツ語の前置詞をめぐる一考察――着点を表す nach, zu, gegen を中心に――』、『ドイツ語学・文学』、第 19 号、慶應義塾大学日吉紀要（1994）